

掲載号・キーワード・執筆者	内容
<p>その 36            (ニューズレター No.106 2023.03.発行)            「佐賀の空襲と有明海」            矢野 生子            (長崎県立大学 経営学部 教授)</p>	<p>有明海は約 6 メートルという日本一の干満差があり、神話の「海彦山彦」に出てくる「(潮)干珠・(潮)満珠」のもとになったという説もある。</p> <p>この壮大かつ不思議な自然現象が佐賀の空襲において予想外の結果を生じさせたという話を佐賀経済調査協会の宮崎善吾(故人)さんに昔、伺ったことがある。</p> <p>宮崎さんによると、「米軍はまず、昼間に爆撃対象地域を調査し、海岸線から何キロに佐賀市内があるかを測量して帰る。しかし、空襲の時間は夜中でしかも当時有明海は引き潮だった。引き潮により海岸線が大きく南に下がっていたため、諸富、北川副、大崎地区の被害が大きくなってしまった。」とのことであった。</p> <p>佐賀空襲については住喜重著『中小都市空襲』によると「米軍の第 58 航空団麾下の 2 軍団 68 機が 1945 年 8 月 5 日の午後 11 時 41 分から 6 日午前 0 時 43 分までの 1 時間に、459 トンの高性能爆弾、焼夷弾を投下したが、闇に隠れた佐賀は燃えず佐賀の消失面積 0 であった。レーダー・スコープ上の佐賀市の映像は弱く、灯火管制も万全であったので、結局南佐賀の田圃に全弾を投下、農家や鎮守の杜を焼いただけで終わった。」とある。佐賀市の HP では、焼夷弾によって多くの家屋が焼け、命を落とされた方は 61 名と記されている。特に国道 208 号線沿いの諸富、北川副、大崎地区は酷く、「堀という堀には村人たちが首まで水につかって、頭には水草をのせて空襲の終わるのをまっていた」と記されている。</p> <p>なぜ佐賀市の被害が少なかったのかについては諸説あるが、宮崎さんが話してくれた有明海の干満差がもたらした結果であるかもしれない。</p>